

「国語＋数学(Ⅰ・A＋Ⅱ・B)＋英語」は、 23.4点アップの358.2点(得点率59.7%)!

旺文社 教育情報センター 2019年3月

2019年センター試験は1月19日(土)・20日(日)本試験、1週間後に追・再試験が実施された。志願者数57万6,830人(前年比1.0%減)、受験者数54万6,198人(同1.4%減)で、ともに4年ぶりの減少である。

大学入試センターから発表された実施結果を基に、過去のデータも含めてセンター試験の実施結果を様々な角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

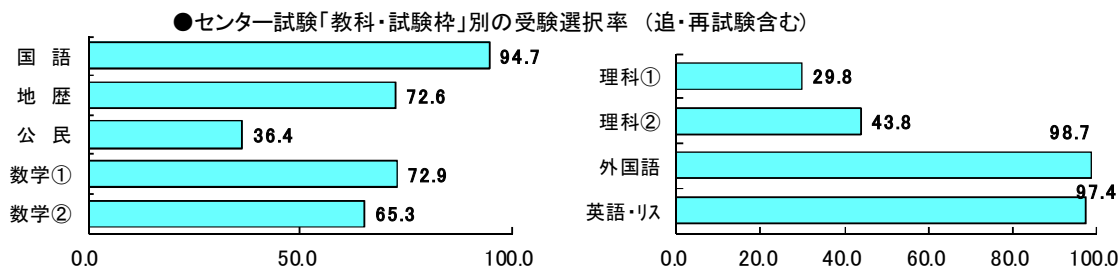
■「教科・試験枠」別の受験選択率

◎ 各「教科・試験枠」別の受験者数の全受験者数(54万6,198人。追・再試験含む実数)に占める割合(受験選択率＝各「教科・試験枠」受験者数÷全受験者数×100)をみってみる。

例年、センター試験(以下、セ試)受験者のほとんどが受験する外国語(筆記)受験者は53万9,236人で、受験選択率は98.7%、英語のリスニングは97.4%。国語は94.7%であった。

2015年からの現行課程先行実施で大きく変わったセ試「理科」の科目構成は、理科4領域において、それぞれ「基礎を付した科目」(標準2単位：以下、「基礎科目」)4科目と「基礎を付していない科目」(標準4単位：以下、「発展科目」)4科目の計8科目からなる。「基礎科目」は理科①の試験枠に配置され、「発展科目」は理科②の試験枠に配置されている。

理科①(基礎科目)の受験者数は約16万3,000人(前年比0.1%増)で、セ試全受験者数に占める受験選択率は29.8%／理科②(発展科目)の受験者数は約23万9,000人(前年比2.1%減)、受験選択率43.8%である。「基礎科目」の受験者数は前年に引き続き増え、受験選択率もアップしたものの、受験選択率は2015年の実施開始以降、5年連続、全「教科・試験枠」中で最も低い。



注. ①「教科・試験枠」別の受験選択率＝各「教科・試験枠」受験者数÷全受験者数×100。

② 各「教科・試験枠」の受験者数は実受験者数。全受験者数は546,198人。

③ 理科①は「基礎科目」、理科②は「発展科目」。／ ④ 外国語は英語を含む筆記試験、「英語・リス」は英語のリスニング。

■ 基幹3教科の平均点合計

◎ セ試平均点には地歴、公民、理科「発展科目」における各科目の「第1解答」(100点満点)と「第2解答」(100点満点)の得点、理科「基礎科目」(50点満点)の“2科目受験必須”の得点が混在し、それらの教科における各科目の平均点の実態は把握しにくい。

そのため、平均点の動向をみる一つの視点として、国公立大の文系・理系に共通の“基幹3教科”である国語、数学、英語の平均点合計を大学入試センターから発表された科目別平均点等の「確定値」を基に算出した。

国語／数学(数学Ⅰ・A＋数学Ⅱ・B)／英語の平均点合計(600点満点)は、次のとおり。

国語＋数学(数学Ⅰ・A＋数学Ⅱ・B)＋英語＝358.2点(得点率 59.7%)

<前年差:得点＝+23.4点、得点率＝+3.9ポイント>

■ 「5教科6科目」の加重平均点

◎ 国公立大受験のセ試科目の標準の目安となる、文系・理系に共通な「5教科6科目」(国語／地歴・公民<合わせて1科目>／数学<数学①と数学②の2科目>／理科<理科①・理科②合わせて1科目>／外国語)の加重平均点(800点満点)を算出した。

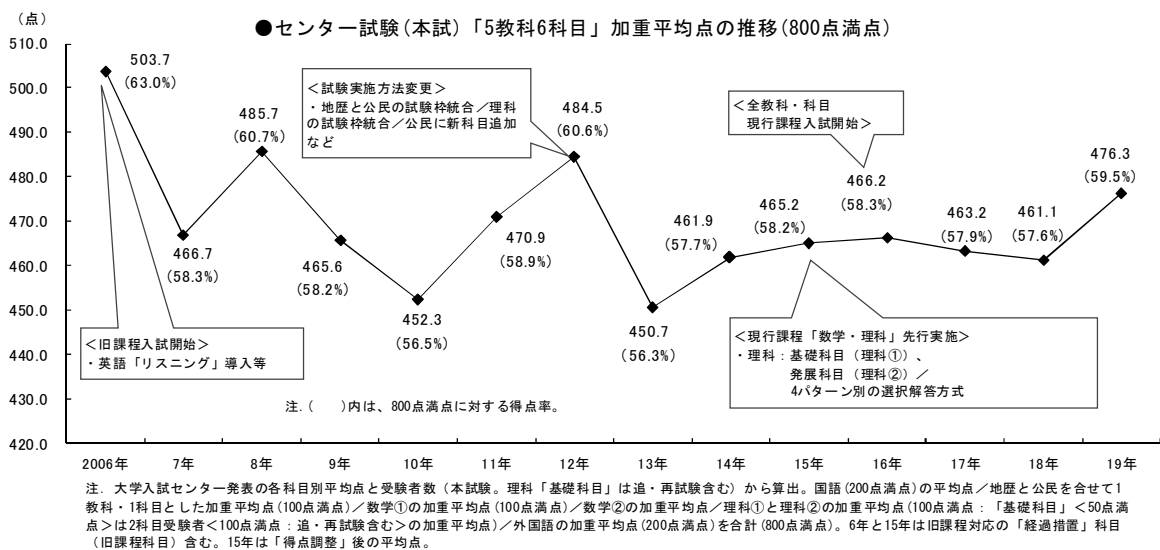
2019年の結果は、次のとおりである。

「5教科6科目」(800点満点)＝476.3点(得点率 59.5%)

<前年差:得点＝+15.2点、得点率＝+1.9ポイント>

前回の新課程入試(2006年。英語にリスニング導入など)の「5教科6科目」加重平均点は503.7点(800点満点:得点率63.0%)と、この13年間では最も高い。2012年の実施方法等の大幅変更(地歴・公民、理科の試験枠統合、公民に新科目設置など)の際は、484.5点(同60.6%)だった。2015年の現行課程「数学・理科」先行実施では、理科の実施方法が複雑・多様化され、平均点は465.2点(同58.2%)に留まり、さほど上昇しなかった。

2016年の全教科・科目の現行課程による全面実施でも対前年1.0点アップの466.2点(同58.3%)だったが、2019年は476.3点(同59.5%)と2012年以来の高い平均点となった。



2019年度 大学入試センター試験(本試験) 平均点等一覧[確定]

<2019年2月25日 大学入試センター発表>

教科	科目	2019年		2018年		前年差		
		受験者数	平均点	受験者数	平均点	受験者数	平均点	
基幹3教科 平均点合計(600点満点) 【国語+数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B+英語(200点換算)】		— (得点率)	358.2 59.7%	— (得点率)	334.8 55.8%	— (得点率差)	23.4 3.9ポイント	
国語(200点)		516,858	121.6	524,724	104.7	▲ 7,866	16.9	
地理歴史・公民	地理歴史(100点)	世界史A	1,346	47.6	1,186	39.6	160	8.0
		世界史B	93,230	65.4	92,753	68.0	477	▲ 2.6
		日本史A	2,359	50.6	2,746	46.2	▲ 387	4.4
		日本史B	169,613	63.5	170,673	62.2	▲ 1,060	1.4
		地理A	2,100	57.1	2,315	50.0	▲ 215	7.1
		地理B	146,229	62.0	147,026	68.0	▲ 797	▲ 6.0
	公民(100点)	現代社会	75,824	56.8	80,407	58.2	▲ 4,583	▲ 1.5
		倫理	21,585	62.3	20,429	67.8	1,156	▲ 5.5
		政治・経済	52,977	56.2	57,253	56.4	▲ 4,276	▲ 0.1
		倫理、政治・経済	50,886	64.2	49,709	73.1	1,177	▲ 8.9
数学	数学①(100点)	数学Ⅰ	5,362	36.7	5,877	33.8	▲ 515	2.9
		数学Ⅰ・数学A	392,486	59.7	396,479	61.9	▲ 3,993	▲ 2.2
	数学②(100点)	数学Ⅱ	5,378	30.0	5,764	26.0	▲ 386	4.0
		数学Ⅱ・数学B	349,405	53.2	353,423	51.1	▲ 4,018	2.1
		簿記・会計	1,304	58.9	1,487	59.2	▲ 183	▲ 0.2
		情報関係基礎	395	49.9	487	59.4	▲ 92	▲ 9.5
理科	理科①(50点)	物理基礎	20,179	30.6	20,941	31.3	▲ 762	▲ 0.7
		化学基礎	113,801	31.2	114,863	30.4	▲ 1,062	0.8
		生物基礎	141,242	31.0	140,620	35.6	622	▲ 4.6
		地学基礎	49,745	29.6	48,336	34.1	1,409	▲ 4.5
	理科②(100点)	物理	156,568	56.9	157,196	62.4	▲ 628	▲ 5.5
		化学	201,332	54.7	204,543	60.6	▲ 3,211	▲ 5.9
		生物	67,614	62.9	71,567	61.4	▲ 3,953	1.5
		地学	1,936	46.3	2,011	48.6	▲ 75	▲ 2.2
外国語(200点)	英語	筆記(200点)	537,663	123.3	546,712	123.8	▲ 9,049	▲ 0.5
		リスニング(50点)	531,245	31.4	540,388	22.7	▲ 9,143	8.8
		筆+リ(200点換算)	—	123.8	—	117.1	—	6.6
	ドイツ語	118	152.2	109	136.8	9	15.4	
	フランス語	102	138.6	109	134.8	▲ 7	3.8	
	中国語	665	150.9	574	154.9	91	▲ 4.0	
	韓国語	174	126.3	146	132.6	28	▲ 6.3	

<注>

- ① 英語の平均点(200点)は、「筆記」(200点)＋「リスニング」(50点)の250点満点を200点に圧縮換算。
- ② 大学入試センター発表の科目別平均点は小数第2位の表示だが、上記では小数第1位で表示。
- ③ 表中の「平均点対前年差」は、四捨五入の関係で「2019年－2018年」と一致しない場合もある。
▲印は「ダウン」(平均点)、および「減」(受験者数)を示す。
- ④ 地歴(各B科目間)、公民(「倫理、政治・経済」除く、各科目間)、理科②(発展科目間)における得点調整は、「生物」－「化学」の8.2点が最大(地学は受験者数が1万人未満のため対象外)で、実施されなかった。

旺文社 教育情報センター(2019年2月25日)



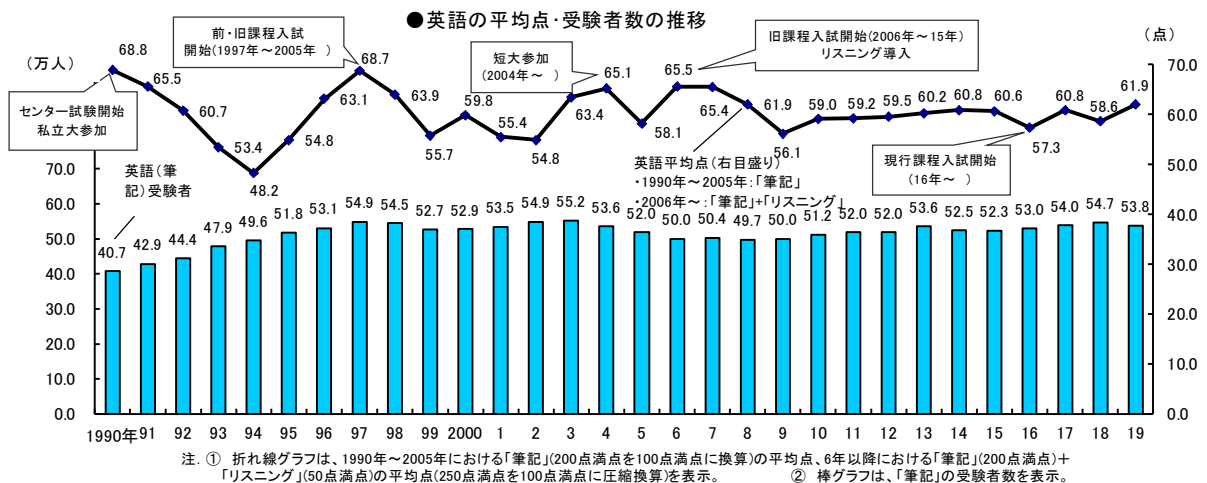
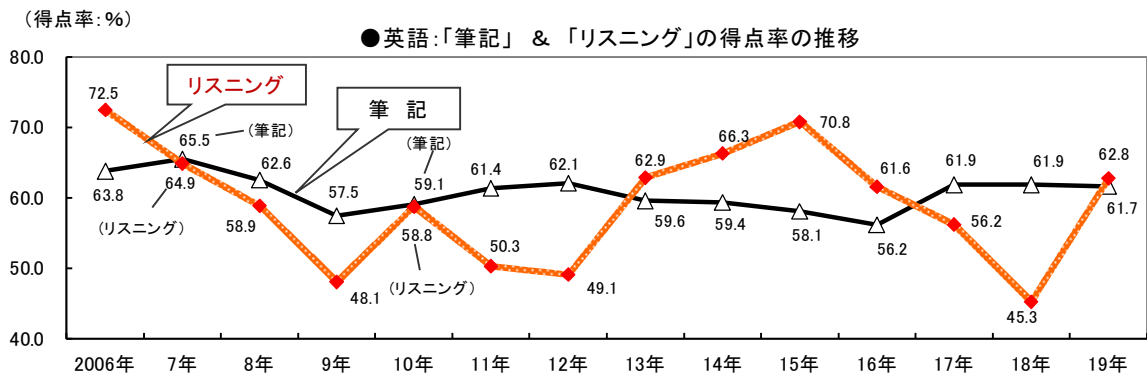
■ **英語**；筆記ダウンもリスニング大幅アップで、「筆記+リスニング」は6点超アップ
リスニングは3年ぶりに得点率60%台に！

◎ 2019年の英語の平均点は筆記が0.5点ダウン、リスニングが8.8点アップし、全体(筆記+リスニング:250点満点を200点満点に圧縮換算)では6.6点アップの123.8点だった。

1990年のセ試開始から2019年までの英語の平均点(1990年～2005年までは筆記のみ、2006年以降は筆記+リスニング)の推移をみると、1994年に過去最低の96.4点(得点率48.2%)を記録した後、V字回復で得点率は概ね5割台半ば～6割台を推移。2013年～15年は6割を維持したが、2016年は割り込んだ。2017年は121.5点(同60.8%)で、2年ぶりに6割台を回復したが、2018年は117.1点(同58.6%)で再び5割台に下降し、2019年は再び6割台となった。

◎ 最近の筆記は、2012年の124.2点(得点率62.1%)以降、2016年の112.4点(同56.2%)まで4年連続ダウンした。しかし、2017年は123.73点(同61.9%)で5年ぶりにアップし、2018年も前年平均点を維持し、2019年も微減で留まった。

一方、リスニングは、2006年の導入時に平均点36.3点(50点満点、得点率72.5%)の高得点を示した後、2009年の24.0点(同48.1%)まで3年連続で急降下。最近では2015年の35.4点(同70.8%)から3連続ダウンして2018年は“過去最低”の22.7点(同45.3%)だった。2019年は一転して大幅アップの31.4点(同62.8%)となった。



■ **国語**；平均点は+16.9 点の 121.6 点。得点率は 60% 台に！

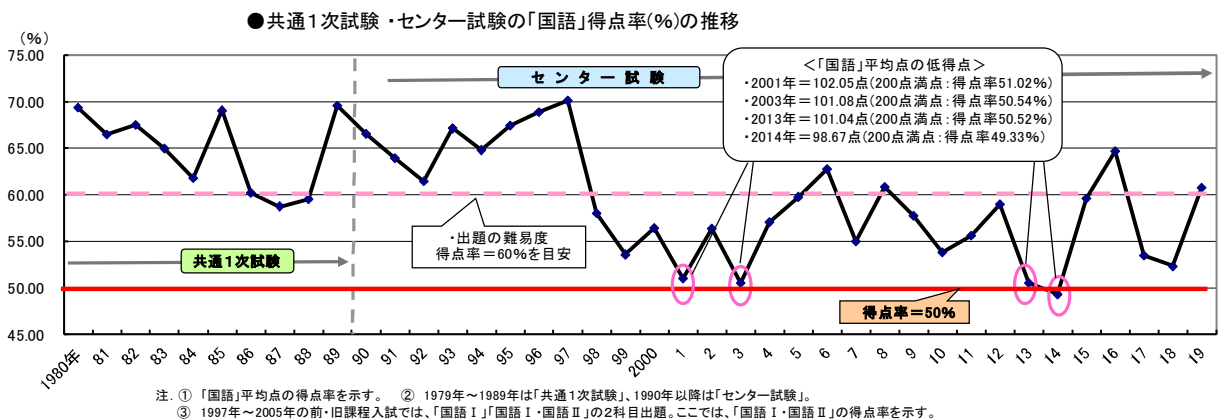
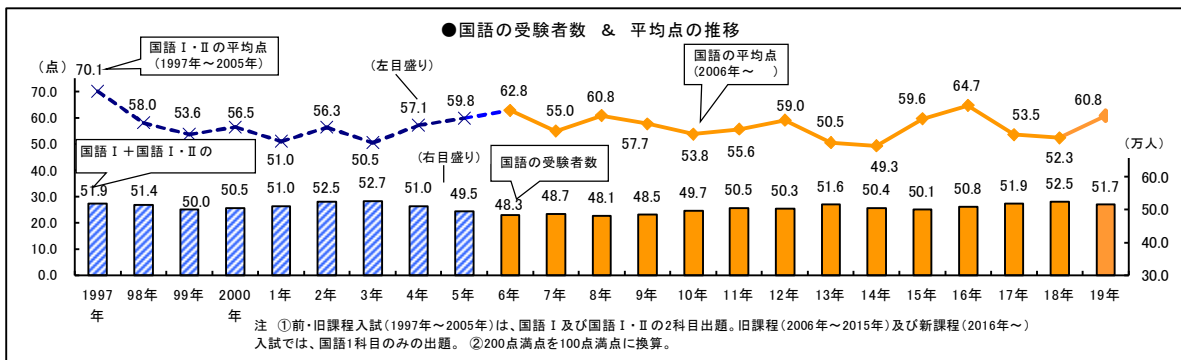
◎ セ試では英語に次いで受験者の多い国語について、1997 年～2019 年の平均点(下図は 200 点満点を 100 点満点に換算)と受験者数、得点率の推移を下図に示した。

◎ 1997 年の国語 I・II (1997 年～2005 年までは、国語 I と国語 I・II の 2 科目。受験者数は圧倒的に国語 I < 国語 I・II) の平均点は 140.2 点と高得点であったが、1998 年には大幅にダウン。その後は 100 点台～110 点台のアップ・ダウンを繰り返し、2003 年には 101.1 点の低得点を記録。

2012 年は得点率を 60% 直前まで回復していたが、2013 年は現代文の難化で、それまでの最低点(2003 年の 101.1 点)より若干低い 101.0 点となった。2014 年は、古文の難化などで平均点は 98.7 点まで下降。共通 1 次試験(1979 年～1989 年：11 回実施)とセ試(1990 年～)を通して初めて平均点(得点率)が 50% を割り、過去最低となった。

◎ 2016 年は得点率が 60% 台に達したが、2017 年は再び下降して得点率は 53.5%。2018 年も平均点が 2.3 点ダウンして 104.7 点となり、得点率はさらに下降して 52.3% だった。2019 年は一転して平均点が 16.9 点アップして 121.6 点となり、得点率も 60% を超えた。

◎ 国語の得点率は、概して「共通 1 次」時代と「セ試」時代の前半(1997 年まで)はほぼ 60% 以上(1987・88 年はわずかに 60% 割れ)の高得点率、それ以降は、ほぼ 50% 台半ば～後半で推移。しかし、最近は、2013・14 年の急落、2015・16 年の V 字回復、2017・18 年の下降、2019 年の急増といった、平均点の激しいアップ・ダウンが目立つ。



注 ① 「国語」平均点の得点率を示す。 ② 1979 年～1989 年は「共通 1 次試験」、1990 年以降は「センター試験」。
 ③ 1997 年～2005 年の前・旧課程入試では、「国語 I」「国語 I・国語 II」の 2 科目出題。ここでは、「国語 I・国語 II」の得点率を示す。

■ **数学**；数学Ⅰ・Aの平均点は-2.2点の59.7点、数学Ⅱ・Bは+2.1点の53.2点！

◎ 数学は2015年から現行課程に沿って先行実施され、出題範囲・内容は現行課程の学習指導要領に対応して変更されたが、平均点等の経年比較は新・旧課程の同一名称の科目間でみる。ただ、2015年の「経過措置」による旧課程「数学」の平均点は除く。

セ試開始(1990年)以降、2019年までの30回に及ぶ数学Ⅰ・A(1990年～96年までは旧・数学Ⅰ)と、数学Ⅱ・B(1990年～96年までは旧・数学Ⅱ)との平均点の推移を下図に示した。

◎ 数学Ⅰ・A(旧・数学Ⅰ含む。以下、同)のこれまでの最低点は2010年の49.0点で、セ試開始以降初めて5割を割った。最高点は2000年の73.7点。

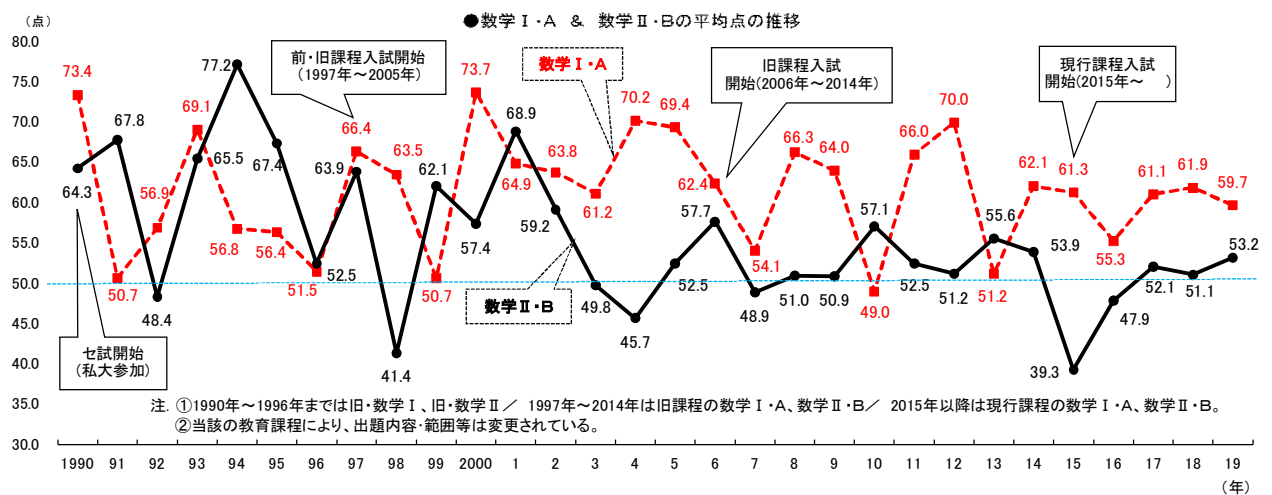
一方、数学Ⅱ・B(旧・数学Ⅱを含む。以下、同)の最低点をみると、現行課程初年度となった2015年の39.3点、最高点は1994年の77.2点で、その較差は37.9点に達する。

◎ 数学Ⅱ・Bの平均点は2019年も含め、過去30回の試験(本試験)で50点未満が7回もあって変動幅も大きいのに対し、数学Ⅰ・Aの平均点50点未満は2010年の1回のみである。

数学Ⅱ・Bは出題範囲が広く、応用問題も出題しやすいため、数学Ⅰ・Aに比べ、難易や問題量などによって不安定な平均点を示しているとみられる。

◎ 最近の数学Ⅰ・Aの平均点は、2010年にこれまで唯一の50点割れとなった49.0点まで急落し、2001年以来9年ぶりに数学Ⅱ・Bを下回った。その後、2011年・12年と2年連続上昇して数学Ⅱ・Bを上回った。2013年は大幅ダウンで数学Ⅱ・Bを下回ったが、2014年は大幅アップ、2015年・16年は2年連続ダウンしたものの、2017年からは6年連続で数学Ⅱ・Bを上回った。

一方、数学Ⅱ・Bは、2010年に数学Ⅰ・Aを上回ったが、2011年・12年と2年連続ダウンした。2013年は3年ぶりに上昇して数学Ⅰ・Aを上回ったが、2014年・15年ともダウンして数学Ⅰ・Aを下回った。特に、2015年は平均点39.3点と、過去最低であった。2016年は8.6点アップで平均点は47.9点、2017年も4.2点アップの52.1点と2年連続アップしたが、2018年は3年ぶりのダウンで平均点は51.1点となった。2019年は上昇に転じ、2.1点アップの53.2点となった。



□ 数学2科目受験は、「数学Ⅰ・A + 数学Ⅱ・B」が約34万9,000人で、2科目受験者の98.0%！

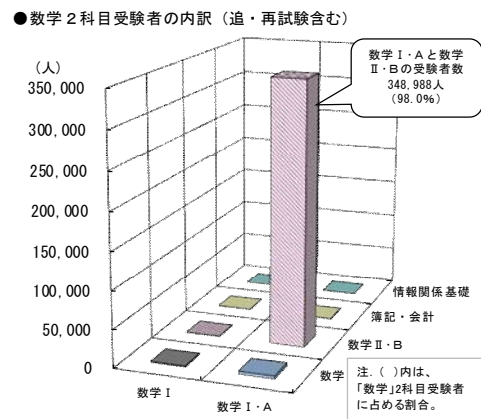
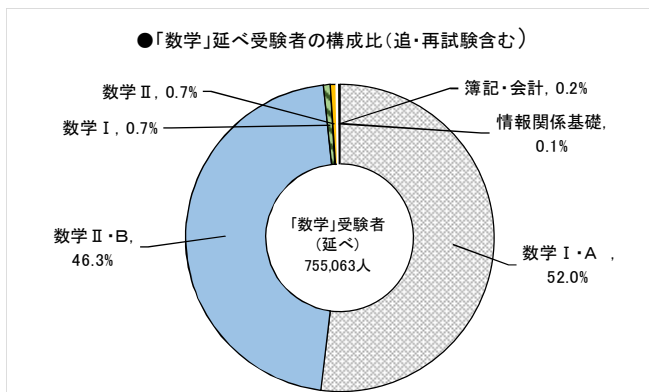
◎ 2019年の数学(数学①と数学②)の実受験者数は39万9,118人。そのうち、「1科目受験者」数は4万3,173人(実受験者数に占める構成率10.8%)、「2科目受験者」数は35万5,945人(同89.2%)である。

他方、数学①と数学②の延べ受験者数は75万5,063人。そのうち、数学①の「数学Ⅰ・A」の受験者数は39万2,867人(延べ受験者数に占める構成率52.0%)、数学②の「数学Ⅱ・B」の受験者数は34万9,747人(同46.3%)である。

また、数学①と数学②の「2科目受験者」(実受験者数35万5,945人)のうち、98.0%を占める34万8,988人が「数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B」を受験している。

◎ ところで、数学は国公立大入試において、理系のみならず、文系にとっても基幹教科であり、上記のように「数学Ⅰ・A」と「数学Ⅱ・B」が主体となっている。

因みに、2019年セ試受験者数の多い科目をみると、「英語(筆記)」約53万9,000人／「英語(リスニング)」約53万2,000人／「国語」約51万7,000人／「数学Ⅰ・A」約39万3,000人／「数学Ⅱ・B」約35万人となっており、この後に理科(約20万2,000人～約2,000人)や地歴(約17万人～約1,000人)、公民(約7万6,000人～約2万2,000人)が続いている。



●「数学」2科目受験者：355,945人の内訳

数 学 ①	数 学 ②			
	数学Ⅱ (人)	数学Ⅱ・B (人)	簿記・会計 (人)	情報関係基礎 (人)
数学Ⅰ	1,397 (0.4%)	536 (0.2%)	249 (0.1%)	27 (0.0%)
数学Ⅰ・A	3,924 (1.1%)	348,988 (98.0%)	521 (0.1%)	303 (0.1%)

注：()内は、「数学」2科目実受験者に占める割合。

■ **地歴・公民**：「公民」全科目“ダウン”。

[地歴、公民]2科目受験者は約 2,000 人(1.3%)“減”の約 14.8 万人！

□ 地歴と公民の受験者動向等

◎ 地歴・公民の試験枠

地歴と公民の試験枠は統合されており、[地歴、公民]([])は試験枠を示す。以下、同の全 10 科目から最大 2 科目の選択が可能である。

ただし、日本史 A と日本史 B など、同一名称を含む科目同士の組合せ・選択はできない。

◎ 平均点“アップ”は「地歴」A 科目と日本史 B、公民は全科目で“ダウン”

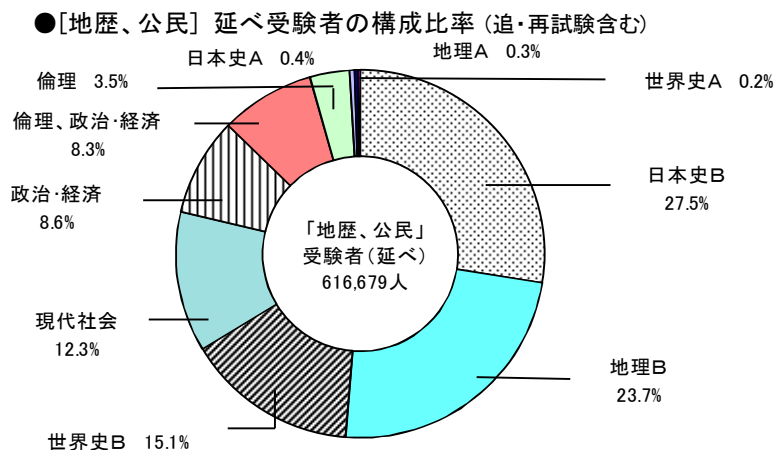
地歴の平均点は、日本史 B +1.4 点(得点率 63.5 点)はアップしたものの、地理 B -6.0 点(同 62.0 点)、世界史 B -2.6 点(同 65.4 点)がダウン。受験者の少ない“A科目”は日本史 A の +4.4 点(同 50.6 点)、世界史 A +8.0 点(同 47.6 点)・地理 A +7.1 点(同 57.1 点)と全科目でアップした。

公民は、「倫理、政治・経済」(以下、倫政経。4 単位相当。他の公民科目は 2 単位)が -8.9 点(同 64.2 点)と大きくダウンしたほか、倫理が -5.5 点(同 62.3 点)、現代社会が -1.5 点(同 56.8 点)など全科目でダウンした。

◎ 地歴の受験者数は約 2,100 人(0.5%)“減少”。公民は約 6,200 人(3.0%)“減少”！

セ試の全受験者数(54 万 6,198 人。追・再試験含む)が 2018 年より 1.4%減少した中、地歴の実受験者数(追・再試験含む)は、2018 年より 2,141 人(前年比 0.5%)減の 39 万 6,652 人。全受験者数に占める地歴の「受験選択率」は、72.6%である。

他方、公民の受験者数は、2018 年より 6,200 人(同 3.0%)減の 19 万 8,954 人。なお、地歴と公民の延べ受験者数は、2018 年より 8,127 人(同 1.3%)減の 61 万 6,679 人である。



□ [地歴、公民]“2科目受験”の状況

◎ 地歴と公民の 2 科目の実受験者数(追・再試験含む)は、2018 年より 1,942 人(前年比 1.3%)減の 14 万 8,498 人である。

試験枠[地歴、公民]の 10 科目(地歴 A = 3 科目、地歴 B = 3 科目、公民 = 4 科目)から 2 科目を選択・受験する組合せは、全部で 40 通り(同一名称を含む組合せを除く)になる。

この40通りを地歴と公民の2教科の組合せで大別すると、次の3パターンになる。

(1) 「地歴」1科目 + 「公民」1科目受験：約12万7,400人、85.8%

「地歴」1科目と「公民」1科目の組合せによる2科目受験者(実受験者。以下、同)は、2018年より2,182人(前年比1.7%)減の12万7,379人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合85.8%)で、2科目受験者の9割近くを占める。このタイプの組合せは、24通りになる。このうち、「地歴B」と「公民」の受験が12万5,588人(同84.6%)で、圧倒的に多い。

科目別の組合せでは、日本史Bと現代社会の組合せが2万7,459人(同18.5%)／日本史Bと政治・経済の組合せが1万7,759人(同12.0%)／日本史Bと倫政経の組合せが1万7,540人(同11.8%)などとなっている。

(1) 「地歴」1科目・「公民」1科目受験

① 「地歴B科目」×「公民」受験：125,588人(84.6%)の内訳

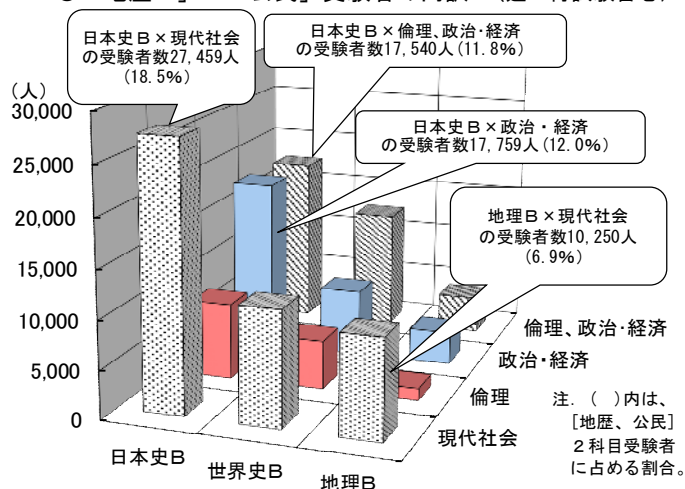
		公 民			
		現代社会 (人)	倫 理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地 歴	日本史B	27,459 (18.5%)	7,827 (5.3%)	17,759 (12.0%)	17,540 (11.8%)
	世界史B	11,803 (7.9%)	5,074 (3.4%)	6,867 (4.6%)	12,485 (8.4%)
	地 理B	10,250 (6.9%)	1,271 (0.9%)	3,422 (2.3%)	3,831 (2.6%)

② 「地歴A科目」×「公民」受験：1,791人(1.2%)の内訳

		公 民			
		現代社会 (人)	倫 理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地 歴	日本史A	417 (0.3%)	90 (0.1%)	267 (0.2%)	27 (0.0%)
	世界史A	224 (0.2%)	44 (0.0%)	117 (0.1%)	18 (0.0%)
	地 理A	390 (0.3%)	61 (0.0%)	120 (0.1%)	16 (0.0%)

注. ()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

● 「地歴B」×「公民」受験者の内訳 (追・再試験含む)



(2)「地歴」2科目受験:約1万8,600人、12.5%

2012年セ試から導入されている、地歴と公民の「試験枠」統合の要因にもなった「地歴」2科目受験については、受験者が2018年より464人(前年比2.6%)増の1万8,605人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合12.5%)である。

また、「地歴B」科目同士の2科目受験者は、2018年より440人(前年比0.5%)増の1万8,240人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合12.3%)に増えた。

「地歴」2科目受験による科目の組合せは、12通りになる。

科目別の組合せでは、地理Bと世界史Bの組合せが7,561人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合5.1%)／日本史Bと世界史Bの組合せが7,341人(同4.9%)のほか、日本史Bと地理Bの組合せが3,338人(同2.2%)となっている。

(2)「地歴」2科目受験

①「地歴B科目」×「地歴B科目」受験:
18,240人(12.3%)の内訳

地歴	地歴	
	世界史B(人)	地理B(人)
日本史B	7,341 (4.9%)	3,338 (2.2%)
世界史B	—	7,561 (5.1%)

注.()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

②「地歴A科目」×「地歴A科目」受験:
122人(0.1%)の内訳

地歴	地歴	
	世界史A(人)	地理A(人)
日本史A	59 (0.0%)	26 (0.0%)
世界史A	—	37 (0.0%)

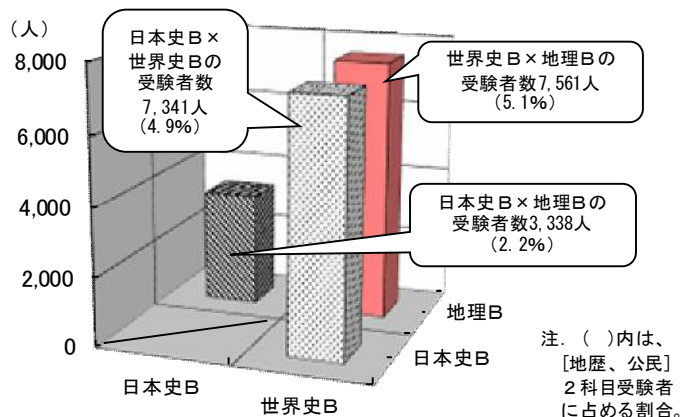
注.()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

③「地歴A・B科目」×「地歴A・B科目」受験:
243人(0.2%)の内訳

地歴	A・B科目	受験者(人)
日本史	A科目×世界史B	41(0.0%)
	B科目×世界史A	59(0.0%)
世界史	A科目×地理B	52(0.0%)
	B科目×地理A	38(0.0%)
地理	A科目×日本史B	36(0.0%)
	B科目×日本史A	17(0.0%)

注.()内は、
[地歴、公民]
2科目受験者

●「地歴B」2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



(3)「公民」2科目受験：約2,500人、1.7%

「公民」同士2科目の組合せは4通りで、受験者は2018年より224人(前年比0.1%)減の2,514人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合1.7%)である。

科目別の組合せでは、現代社会を基軸に、政治・経済との組合せが1,872人(同1.3%)／倫政経との組合せが256人(同0.2%)のほか、政治・経済と倫理との組合せが169人(同0.1%)などである。

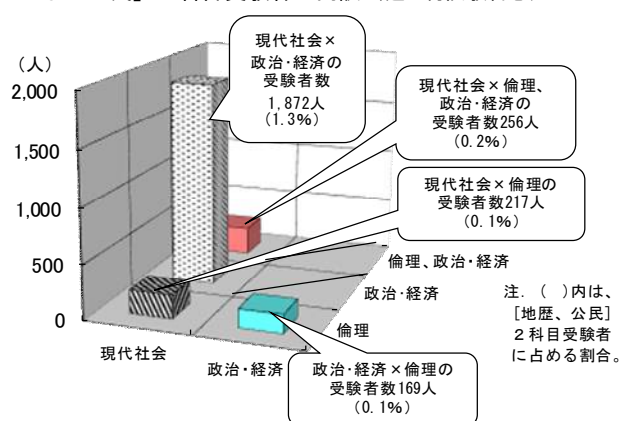
(3)「公民」2科目受験

●「公民」4科目から2科目受験：2,514人(1.7%)の内訳

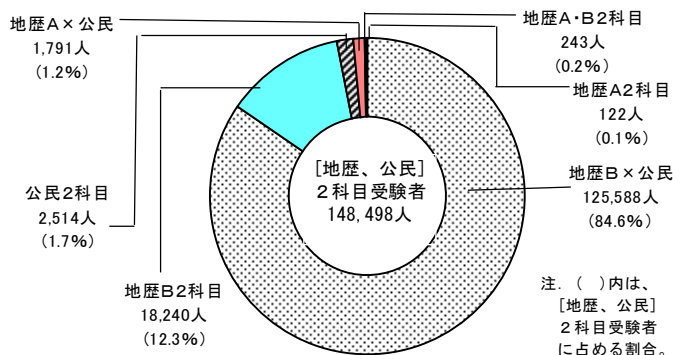
	公 民		
	倫 理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
公 現代社会	217 (0.1%)	1,872 (1.3%)	256 (0.2%)
民 政治・経済	169 (0.1%)	—	—

注. ()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

●「公民」2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



●[地歴、公民]2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



- **理科**：「基礎科目」受験者約 16 万 2,600 人、「発展科目」受験者約 23 万 9,400 人！
「選択パターン」別受験者比率：A=38%、B=9%、C=5%、D=49%！

□ 「理科」の選択解答方法

2015 年から現行課程に対応して先行実施された「理科」は、物理・化学・生物・地学の 4 領域の各「基礎科目」（標準 2 単位）を理科①に、各「発展科目」（標準 4 単位）を理科②に配置し、全 8 科目を次のような A～D の“4 パターン”のいずれかによって選択解答する。

- A＝「基礎 2 科目」：物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎から 2 科目選択解答。
(4 単位相当)
- B＝「発展 1 科目」：物理、化学、生物、地学から 1 科目選択解答。(4 単位相当)
- C＝「基礎 2 科目＋発展 1 科目」：物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎から 2 科目、及び物理、化学、生物、地学から 1 科目選択解答。
(3 科目選択解答：8 単位相当)
- D＝「発展 2 科目」：物理、化学、生物、地学から 2 科目選択解答。(8 単位相当)

◎ 選択解答の留意事項

- 「発展科目」については、旧課程で“選択履修”であった学習項目が現行課程では“必修化”されたが、受験者の大幅な負担増にならないように“一部に選択問題”が配置されている。
- 理科①(基礎科目：50 点満点)については、“1 科目のみの受験は認められない”。
試験時間は 2 科目で 60 分。
- 理科②(発展科目：100 点満点)の試験時間において 2 科目を選択する場合、解答順に「第 1 解答科目」及び「第 2 解答科目」に区分して各 60 分間で解答する。「第 1 解答科目」と「第 2 解答科目」の間の答案回収等の時間を含め、合計時間(130 分)が試験時間となる。
- 選択解答方法(A～D)は、出願時に「事前登録」する。
- 選択解答方法 C における「基礎科目」と「発展科目」の組合せで、同一名称を含む科目同士の選択については制限されず、同一名称を含む科目同士の選択は可能である。
ただし、セ試を利用する大学(学部)によっては、「基礎科目」と「発展科目」における同一名称を含む科目の組合せを不可としているところがある。
因みに、地歴と公民では、同一名称を含む科目の組合せで 2 科目選択はできない。

□ 受験者の動向

◀理科①の受験状況▶

(1)「基礎科目」受験者：前年比 0.1%“増”の約 16 万 2,600 人。「理科」受験者の 40.5%

理科①の「基礎科目」の実受験者数は 16 万 2,575 人で、理科②の実受験者数 23 万 9,317 人との合計 40 万 1,892 人(C パターンの理科①と理科②の重複受験者含む)の 40.5%である。

2019 年の「基礎科目」の実受験者数は、前年に比べ 166 人、0.1%の増加となった。物理基礎の約 800 人(前年比 3.6%)減と化学基礎の約 1,000 人(同 0.9%)減の一方、生物基礎は約 700 人(同 0.5%)増、地学基礎は約 1,400 人(同 2.9%)増となっている。

(2)「基礎科目」の科目別選択率：生物基礎 43.5%、化学基礎 35.0%

理科①の「基礎科目」の延べ受験者数 32 万 5,201 人の受験状況は、次のとおりである。

生物基礎は受験者数 14 万 1,344 人、理科①の延べ受験者数に占める割合 43.5% / 化学基礎は 11 万 3,887 人、同 35.0% / 地学基礎は 4 万 9,774 人、同 15.3% / 物理基礎は 2 万 196 人、同 6.2% で、「基礎科目」受験は生物基礎と化学基礎が中心となっている。

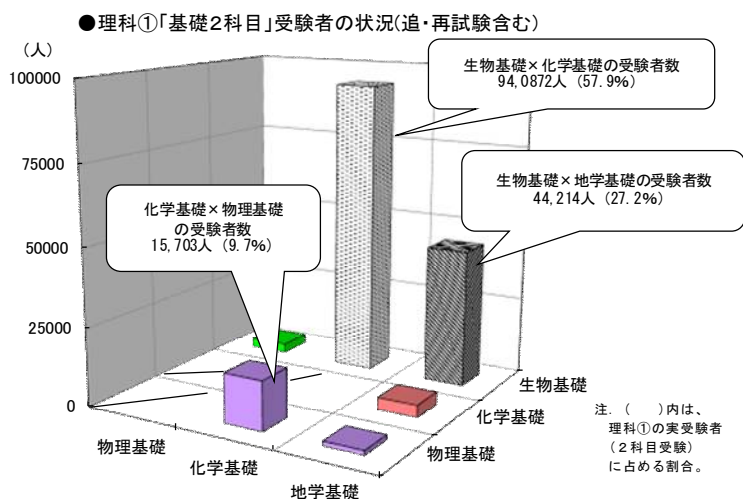
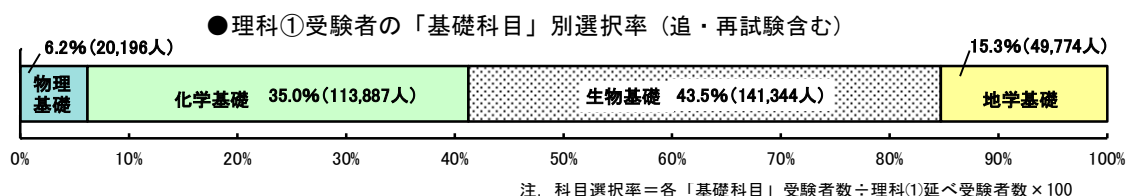
(3)「基礎2科目」の組合せ:

「生物基礎+化学基礎」57.9% / 「生物基礎+地学基礎」27.2% など、“文系色” 反映!

「基礎科目」は“2科目受験が必須” となっており、受験科目の組合せ状況は、次のとおりである。

「生物基礎+化学基礎」は受験者数 9 万 4,087 人、科目選択率 57.9% (理科①の実受験者数に占める割合) / 「生物基礎+地学基礎」は受験者数 4 万 4,214 人、同 27.2% / 「化学基礎+物理基礎」は受験者数 1 万 5,703 人、同 9.7% など。

「基礎科目」は、生物基礎を中心に化学基礎や地学基礎との組合せが主体で、例年同様、“文系志望者” 受験を反映した結果となっている。



●理科①: 「基礎2科目」受験者数162,575人の科目選択内訳(追・再試験含む)

		理科①			
		物理基礎(人)	化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)
理科①	物理基礎	—	15,703 (9.7%)	3,012 (1.9%)	1,477 (0.9%)
	化学基礎	—	—	94,087 (57.9%)	4,082 (2.5%)
	生物基礎	—	—	—	44,214 (27.2%)

注. ()内は、「基礎2科目」実受験者に占める割合。

《理科②の受験状況》

(1)「発展科目」受験者：約 23 万 9,300 人、「理科」受験者の 59.5%

理科②に配置された「発展科目」の実受験者数は 23 万 9,317 人で、2018 年の理科②の実受験者数 24 万 4,390 人に比べ、5,073 人(2.1%)の減少となる。

また、理科①と理科②の実受験者数の合計 40 万 1,892 人(Cパターンの理科①と理科②の重複受験者含む)に占める「発展科目」の実受験者数の割合は 59.5%で、前年より 0.5 ポイント下回った。

(2)「発展科目」の延べ受験者の構成比：

「化学」受験 47.1%、「物理」受験 36.6%、「生物」受験 15.8%など、“理系色”反映！

「発展科目」の延べ受験者数 42 万 7,892 人の各科目の構成比率は、次のとおりである。

化学 47.1%(受験者 20 万 1,539 人)／物理 36.6%(同 15 万 6,736 人)／生物 15.8%(同 6 万 7,678 人)／地学 0.5%(同 1,939 人)。

各科目の構成比率を 2018 年と比べると、物理が 0.5 ポイント、化学が 0.1 ポイントそれぞれ上昇し、生物が 0.6 ポイント下降した。

《「選択パターン」別受験状況》

(1)「発展2科目」の A パターンのみ増加

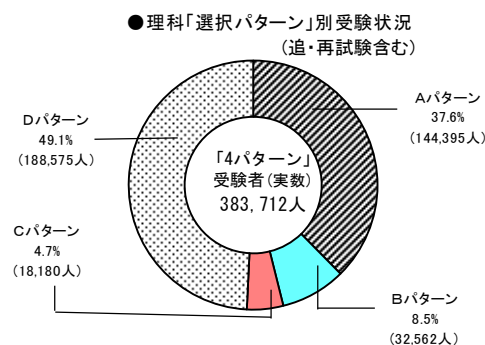
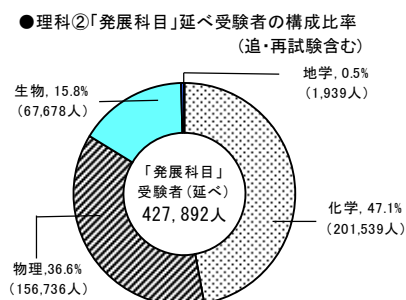
セ試「理科」は、前述のように A～D の 4 パターンからの選択受験となる。

2019 年の各「パターン」別受験者の 4 パターン実受験者数 38 万 3,712 人に占める割合は、次のとおりである。

A パターン：37.6%(受験者数 14 万 4,395 人)／B パターン：8.5%(同 3 万 2,562 人)／C パターン：4.7%(同 1 万 8,180 人)／D パターン：49.1%(同 18 万 8,575 人)。

「発展 2 科目」選択の D パターンの受験者数は 2018 年より 2,691 人(1.4%)減り、セ試「理科」受験者に占める割合も 0.2 ポイント下降したのをはじめ B、C パターンも各 0.3 ポイント下がった。4 パターン合計の受験者数(理科の実受験者数)は、前年より 3,882 人(1.0%)減の 38 万 3,712 人となった。

なお、看護・医療系などにみられる“Cパターン”(基礎 2 科目+発展 1 科目：8 単位相当)は 2018 年より 1,025 人(5.3%)減の 1 万 8,180 人で、「理科」受験者に占める割合も 0.3 ポイント下降の 4.7%となった。



(2) A:「生物基礎＋化学基礎」主体 / B:物理、化学、生物の1科目選択比率ほぼ“均等”

C:「生物基礎＋化学基礎＋生物」主体 / D:「化学＋物理」主体

A～Dの各パターンの科目選択の内訳をみると、およそ次のようになっている。

Aパターンは、「生物基礎＋化学基礎」が60%近くで主体/Bパターンは物理(約41%)、化学(約30%)、生物(約28%)の1科目選択比率がほぼ均等/Cパターンは、「生物基礎＋化学基礎＋生物」が40%強で主体となっている。また、Dパターンは「化学＋物理」が70%強、「化学＋生物」が約26%である。

●Aパターン：実受験者数144,395人の科目選択内訳（追・再試験含む）

		理 科 ①			
		物理基礎(人)	化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)
理 科 ①	物理基礎	—	10,419 (7.2%)	2,348 (1.6%)	1,339 (0.9%)
	化学基礎	—	—	83,542 (57.9%)	3,632 (2.5%)
	生物基礎	—	—	—	43,115 (29.9%)

注. ① 理科①(基礎科目)から2科目を選択受験。
② ()内は「Aパターン」の実受験者に占める割合。
③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Bパターン：実受験者数32,562人の科目選択内訳（追・再試験含む）

理 科 ②			
物 理(人)	化 学(人)	生 物(人)	地 学(人)
13,301 (40.8%)	9,839 (30.2%)	9,263 (28.4%)	159 (0.5%)

注. ① 理科②(発展科目)から1科目を選択受験。
② ()内は「Bパターン」の実受験者に占める割合。
③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Cパターン：実受験者数18,180人の科目選択内訳（追・再試験含む）

		理 科 ①					
		物 理 基 礎			化 学 基 礎		
		化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)	生物基礎(人)
理 科 ②	物 理	2,746 (15.1%)	247 (1.4%)	88 (0.5%)	421 (2.3%)	86 (0.5%)	32 (0.2%)
	化 学	2,142 (11.8%)	301 (1.7%)	32 (0.2%)	2,218 (12.2%)	88 (0.5%)	161 (0.9%)
	生 物	365 (2.0%)	108 (0.6%)	3 (0.0%)	7,714 (42.4%)	243 (1.3%)	564 (3.1%)
	地 学	31 (0.2%)	8 (0.0%)	15 (0.1%)	192 (1.1%)	33 (0.2%)	342 (1.9%)

注. ① 「理科①(基礎科目)から2科目＋理科②(発展科目)から1科目」の選択受験。
② ()内は「Cパターン」の実受験者に占める割合。
③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Dパターン：実受験者数188,575人の科目選択内訳（追・再試験含む）

		理 科 ②			
		物 理(人)	化 学(人)	生 物(人)	地 学(人)
理 科 ②	物 理	—	138,438 (73.4%)	879 (0.5%)	498 (0.3%)
	化 学	—	—	48,099 (25.5%)	221 (0.1%)
	生 物	—	—	—	440 (0.2%)

注. ① 理科②(発展科目)から2科目を選択受験。
② ()内は「Dパターン」の実受験者に占める割合。
③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

□ 「理科」平均点

◎ 物理は5.5点ダウン／化学は5.9点ダウン／生物は“1.5点アップ”／

文系志望者の受験が多い「基礎科目」の平均点(50点満点)を得点率でみると、物理基礎61.2%、化学基礎62.4%、生物基礎62.0%、地学基礎59.2%である。

他方、各「発展科目」における平均点(100点満点)及び前年差は、次のとおり。

物理56.9点(-5.5点)、化学54.7点(-5.9点)、生物62.9点(+1.5点)、地学46.3点(-2.2点)。地学の平均点(46.3点)は、2016年の38.6点に次ぐ過去2番目の低得点で、得点率50%割れは3度目である。